

韓 国 の 旅 (57・9・17)

林屋辰三郎(昭10文甲)

一週間のツアー旅行のようなものですから、珍しいこともありませんが、歴史研究者の眼に映った韓国ということで、印象をお話することになりました。

韓国とは、今も尚教科書問題、その他複雑な問題がございますけれども、私共歴史の立場から申しますと、古代・中世・近代と、各時代によって、日本との関係は同じではございません。古代の日韓関係は、私の専攻の立場から特に興味が深いので、大体その辺を中心としまして、一週間の前の半分に、大体百済を、後の半分に新羅を中心とした、所謂三国時代の遺蹟を見て廻つて来たのです。

古代の日韓関係というのは、歴史の方では、先入観の様なものがございますが、日本の歴史の中では、ご承知のように神話伝承という部分がございますが、その取扱い方がまず問題となります。考古学の面が、戦後特に発達したからと言って、この神話伝承は、全く取るに足らないと言

った様に、割り切つて、切り捨てて仕舞うのは、一寸性急ではないか、やはり考古学の遺物の様に物質的なものによつて、裏付けて行くことを、同時に神話伝承の中に伝えられている精神的なものも勘案しながら、古代の日韓関係を考へて行くことが、大事ではないかと、いう風に思つております。

その神話伝承の中にも、ご承知の素盞鳴尊の出てくる、三貴子の分治という事がありまして、古事記・日本書紀では、天照大神と、月読命と素盞鳴尊の三貴子が、伊弉諾尊・伊弉冉尊の間に生れ、高天原と、夜の国と、根の国（古事記では海原と書いている）を、それぞれ支配するといふ形となつた。ところが素盞鳴尊がどうしても、従わないで、乱暴をするので、高天原から追い払つた。その追い払われた場所が、根の堅洲国カタスであるといふのです。この根の国の記載が、新しい問題で、今迄の研究では、様々な説がありますが、死後の世界であるといふのが定説です。又喜田貞吉先生などは、出雲の国の事であると言われています。然しそれも、どうも納得出来ない所があつて、最近の古代史家の中で、面白い説が出て来ました。それは根といふのは親しみのある言葉で、根の国といふなかに、その言葉に、ひどく親愛感が込められている。又ものごとの根本という事だから、現代風にいうと、ルーツである。根の国という言葉に、日本のルーツという意味があるといふのです。これは九州大学教授の田村圓澄氏が説いた説で、私はこの説はかなり有力な説として、受け入れたいと思つています。根の国をその様に、日本の文化そのもののル

ソウの国であるという理解は、今迄の歴史の中では、あまり言われて来なかったのです。そこで素盞鳴尊が、朝鮮の曾戸茂梨ソシモリという所に、天降ったというような伝承も、日本と朝鮮が同じ祖先であったという事を強調して、昔から日本が、朝鮮を支配していたという事を、神話の中で、説明しようとしたものと説かれて来た。しかしどうもそうではなく、もつと親近な関係があり、むしろ古代文化の母国ではないかと考えていた時に、新しく根の国の面白い解釈が出て来たのです。そういう事があって、私は韓国へ一度も未だ行つてなかつたので、根の国たる所で、ルーツを探りたいと考えている所へ、丁度博物館の方で、秋の特別展覧会のための、視察の用務ができたというのが、旅立ちのチャンスであります。

先程申した様に、僅か一週間なのですが、最初は空路でソールへ着きました。ソールは四世紀のはじめ、百済の国が出来まして、最初の百年位の間の王城の跡である。昔は漢域と申しまして、現在のソールの南の方に遺蹟が残っている。これは未だ、完全な調査が出来ていないということと、時間の関係で参観できなかった。ともかく漢域に百年、更にずっと南の方へ下りまして、公州、そこに熊津とよばれていた、中期約百年の王城の地があります。最後に又西へよりまして、扶余という所がありますが、そこは泗沘と呼ばれた所で、後期百年王城がありました。即ち三期三ヶ所に亘つて、点々と王城があつたのであります。

そこで一寸現状を拝見しまして、非常に強い印象を受けましたのは、韓国というのは、一つの

国には相違ないのですが、西半の百済という地域は、それだけでまともがあり、それぞれの王城を中心として、遺蹟のなかにどことなく哀愁が込められている、そういう印象を受けました。これは百済が、終始日本と同盟的な関係にありまして、最後に唐・新羅の連合軍に亡ぼされる時には、日本から救援軍まで送った白村江の戦いというものがありませんが、そこが扶余であります。扶余に参りますと、全体として、碁盤状の條坊などが残っておりまして早く百済にも、中国の影響を受けた都城制が這入ったという事を、証明していました。そしてその王宮の裏山の落花台というあたりに、三千の宮女が争って白村江に入水したという悲話が伝えられていて、非常に強い印象でありました。

その哀愁の中の一つとして、公州では、武寧王陵という、百済中期の王城の最後の王陵を参観しました。日本に仏教を伝えた聖明王の父王であります。そこでは大変有難かったのですが、そのお墓の中迄も、ずっと案内して戴いて、練瓦造りできっちり、整然とした形で、墓が作られています。全体を飾る花の紋様が蓮で、練瓦を二つ合すと、丁度円い蓮の花になるようにしてある。そこなんか誠面に面白い。やはり仏教文化を日本へ伝えたルーツの国であるという事がある。非常にはっきり分った。で日本には仏教以前に蓮の花があるかどうか。九州の採色古墳などの中に、輪形の花ではないかという意匠がございますけれども、武寧王陵を見ますと、これは本格的な蓮で、仏教と共に、這入って来たものと考えざるを得ません。

そして公州で非常に感心したのは、博物館の展示が、行き届いていまして、私は陵墓の中まで入れて貰いましたが、武寧王陵は殆んどその内容を全部見られる仕組になっている。公州博物館というのは、武寧王陵の為に、建てられた博物館と言ってもいいのです。王陵の石室の両側に、掘り込みが作ってある。側面に三ヶ所、正面に二ヶ所、全部で八ヶ所の掘り込みがあって、そこに燈明を置いてあって、石室を閉封してからも、石室を照らす様にしてある。そこで発掘された場合でも、石室を鎖してから後までも、燃えておった油のかすが残っていて、それをそのまま、公州の博物館に展示されている。これを見ますと、死後の世界に対して、どんなに強く、関心を持っていたか、感動的にかがわれました。もう一つの面白いのは、買地券と申しまして、人間が死ぬと、葬った場所は、永久にその人のものとして、遺族がその土地を買うのですね。その買った時の証文です。買地券を石に彫りまして、その石を墓の正面の入口の所へ置く。もう一つは一角獣の置物を置いて、これを墓の鎮めとする。そこには合法的な土地を買った時の、証文を置いて、これは誰も犯す事が出来ない土地であることと、示して置いてある。もう一つは悪魔が来て、遺骸をいためる事のない様にと、鎮墓のために一角獣という、恐ろしい動物を置いてある。それは呪術と、法的文書というものが、一つの場所で、それぞれの立場で、置かれてあるわけですね。こういう所なども墓というものをめぐって、昔の人の物の考え方に、非常に感銘しました。武寧王陵が閉じられた後迄、静かに照らしていたという、石室の中の事を考えながら、帰って来

たのです。王と王妃の二つの棺が置かれてある。こういう所に、死後の世界に行く者の感慨が非常に強く、印象づけられたのでした。

後半の一週間は、新羅の参観ですが、かねてから、私は韓国へ行きまして、一つだけ是非訪ねて見たい所があり、一日をその為に割きました。それは前年、京都国立博物館で、京都梅尾の高山寺の展覧会を致しまして、その時華嚴縁起が展示されました。華嚴縁起は、新羅の義湘という坊さんが、中国へ留学して、勉強しているうちに、善妙という女の人に大変に懸想されて供養を受けたが、愈々義湘が韓国へ帰るといふ時に、善妙からは非連れて帰ってくれといふ話になる。それでも義湘は、ふりきって、自分が先に帰って仕舞ったから、善妙は後から龍になって、追いかけて来て、義湘の乗っている船を、背中に乗せて、新羅まで送って来たといふ話であります。それだけでなく、この義湘が帰ってから開いた寺に、義湘の船を乗せて来た龍が石になって残っていると言われていたので、それはどういふものか見たかったです。これとよく似た女性の懸想談が、安珍と清姫の話で、道成寺縁起は、日本でも大変有名だが、道成寺の説話は、多分華嚴縁起の話が、元となっていないのではないか。そういう事を考えても、一度訪ねたかったです。この行程が大変で、僅か一週間の日程のうちで、まるまる一日を取りました。大田市の東にある儒城という温泉に泊って、そこから東北の方ですが、タクシーを利用して、大白山浮石寺という、その寺に参りまして、浮石の残骸なども見て参りました。これは恐らく、韓国の説話と、日本の

道成寺縁起の間に、何等かの共通点があるのではないかと思います。もう一つ驚いた事には、日本では全く見られない程庶民的に、信仰が強い事ですね。こんなに韓国の仏教が、民衆に密着した形で、信仰されているという事は、思いもよらなかつた。今日本のお寺へ行っても、信者が地面に身を投げうつような形で、信仰しているというような事は、お坊さんでも余り見られないですが、それを村の人達が、皆熱心に礼拝していた。浮石寺という寺なども、そういう人達で一杯でした。

丁度旧の二月の朔日でありました。韓国では、「^{ヤンバン}両班の正月」に、「^{ヌヒ}奴婢の正月」があり、一月の正月は貴族が喜ぶけれども、二月の朔日は奴婢の作つた正月である。奴婢という言葉は、非常に古い言葉ですが、庶民の人々が着飾って、山の奥のお寺へお参りに来て、その着飾つたままで平伏して信仰している。仏様そのものは、全く金ピカで、そんなに有難いとも思わなかつたのですが、その信仰は、全くという宗教の極致を示しているという感じがします。

それから後は、東海岸まで出て、夜になって、北から慶州へ這入つて来ました。慶州という所では、私の場合は、博物館を見学し、それから附近の史跡を案内して戴けたのですが、仏国寺とこの流石に立派なものです。石窟庵の仏像程のものは、日本にもございます。だから本当に残つた仏像と、一般の信仰されている仏像とは、質的に違つた様な感じがする。非常にすぐれた仏像を拝見し、それから慶州の博物館でも、多数の文化財に驚かされました。新羅の宮

廷の中に、雁鴨池という池がありました、その池が発掘されて、今それが復元されて、立派に残っている。もとは大変荒れていたけれど、その池の中から、出土されたものを、整理して慶州博物館の一棟に陳列している。大きな博物館の施設が、その遺蹟のものだけで構成して行く、そういう豊かさがありますね。なかなか日本の博物館では、そんなわけには行かんと思う。ここでははじめ期待していた三国時代の新羅よりも、統一新羅の遺跡にひかれました。

今そこで見たものは、我々歴史を学んでいる者にとって、大きなショックでしたが、今までは三国時代北の方の高勾麗は、一寸置いておきまして、百済と新羅とこの二つの国が、極めて不和で対立し、最終的には新羅が、中国と結んで百済を亡す事になる。それより後日本では、大陸との関係を、もう直接に随唐とつないで仕舞って説明するのですね。歴史には色んな問題がありますが、ここにも一寸問題がありました、私は韓国に行つて見て、やはり新羅即ち統一新羅というものに眼をおいて、それを正しく評価すべきものと思いました。その事を考えさせられたのは、慶州の博物館には非常に展示がうまくて、正倉院の図録を切り抜いて、雁鴨池の出土品に対比させてある。そのように、二つ並べると、全く同じものが出て来る。それはその雁鴨池の中に出て来る、一つの日常の器具ですが、そういうものが、正倉院のものと全く同じです。それを見ましても、やっぱり何か、すぐ唐とつないで行くのではなく、新羅というものが、根の国として、大きな意義を持ったのではないかと思われてくるのです。

雁鴨池は非常に、我々に役立ちました。それから後、慶州には、沢山の寺があります。それは遺蹟になつていて、それを見せて戴いたのでありますが、色んな意味で、日本の飛鳥奈良時代の仏教寺院を考へる場合に、ここにこそルートがあると感じました。

全体として理性的で伸びて行くという感じがございます。現代の韓国の政策自身の中にも、百濟より新羅の部分について、力が這入っている様な感じがするので、これは大統領の出身地と関係があるという話も聞きましたが、それはどうでしょうか。

そういうわけで、百濟と新羅との、二つを比べて見て、日本人の好きな情緒性が強く、懐旧的になるのは百濟で、これに対して、日本の将来の歴史の上で、指針となつたのは、新羅であつた様に感ぜられました。色々話は尽きませんが、この位で留めるのがよからうと思つたので終りとします。

(京都大学名誉教授
前京都国立博物館々長)